【総評】

直接交流から始まる共生

朴惠仁（お茶の水女子大学）

「日韓・東アジアが共に生きるために」をテーマとする第 11 回目の今年のセミナーに、お茶の水女子大学と同徳女子大学校から約 50 名の学生が集まった。参加学生は１週間共に生活しながら、日韓が共生する未来のために真剣に話し合った。その内容は、私にとっても大変勉強になるものであり、今年もこのセミナーに参加できたことをとても嬉しく思っている。

今年の日韓セミナーは日本で行われた。しかし、セミナーを準備したのは日本の学生だけではなく、韓国の学生も一緒になってセミナーの全てのイベントを進めた。今回のセミナーは例年より、特に学生が主体になったセミナーだったと思う。今年の日韓セミナーを作り上げたのは、実行委員をはじめ、全ての参加学生である。ここで改めて全ての参加学生に感謝の気持ちを伝えたい。

また、今年も昨年に続き、お茶の水女子大の学生は韓国語を勉強し、韓国語で第１次発表を行った。ほとんどの学生が韓国語は初めてであったにもかかわらず、素晴らしい韓国語で発表することができたと思う。そして、韓国語が上手に話せない日本側の学生のために、慣れない日本語で一生懸命コミュニケーションをとってくれた、韓国側の学生にも感謝の気持ちを伝えたい。全ての学生が、文化と言語の壁を乗り越えて、発表・交流してくれた。

第 11 回目になる今年の日韓セミナーは、私にとっては３回目の日韓セミナーだった。毎回参加する学生は異なるが、変わらず感じられることは、直接出会って交流することの素晴らしさである。初めて出会った日本人と韓国人が共に過ごす１週間は、多くの参加学生の考え方や価値観が変わることのできる大切な時間であると思う。私自身も、学生として日韓セミナーに参加して日本が好きになり、日本に行ってみたいと思うようになった。元々日本や韓国が好きだった人はもちろん、お互いの国に先入観を持っていた人も、セミナーに参加し、直接交流することで、自分の考えを見つめ直す機会になったと思う。

このような経験は、このセミナーのテーマである「共生」のために重要なことであると考える。共生とは、互いに理解し合い、互いの違いを尊重し、共によりよく生きることである。日本の学生と韓国の学生は、それぞれ異なる国で育ち、異なる教育を受け、異なるバックグラウンドを持っている。このような違いを、居心地の悪いものに感じる人もいるかもしれない。しかし、セミナーに参加した日韓の学生は、共に互いの立場に立って考え、互いの違いを尊重し、互いに理解を深めていた。このような姿勢こそが、まさに共生にとって必要なことであり、このセミナーの最も重要な成果である。

セミナーに参加した学生は、日韓合わせて 50 名程度であるが、この経験は毎年引き継がれ、さらに参加学生の周囲の人々にも伝わっていく。これは小さな変化であるかもしれないが、着実により良い日韓関係を作っていくものだと、私は信じている。

約１週間の短い経験ではあるが、セミナーでの経験は、参加学生が今後さらにグローバル化していく世界へ旅立つための、大切な土台となるだろう。このセミナーでの経験、そしてこのセミナーでの出会いを、これからも大切にしていって欲しい。

総評

金嚅泳（同徳女子大学校）

毎年お茶の水女子大学と同徳女子大学校が協力して開催する「日韓大学生国際交流セミナー」は今年で 11 回を迎えることになった。このセミナーは日本と韓国の学生たちが集まって両国における歴史・文化・交流など、様々なテーマをもって主体的に話し合い、意義のある共同発表を導いていくという形で行わるものである。長い間行われてきたこのセミナーで、私がいつも参加した学生たちに言っておきたい話があるが、それは他ではなく「学生たちがこの場で集まってくれたその時点でこのセミナーの目的はもう達成したものだと、話し合おうと思うその姿勢こそに意味があると私は思う。その故、日本と韓国の未来もう既に私たちの目の前にある」ということである。

実際、同じ国或いは同じ地域の人々同士であってもお互い理解し得る、理解しようと努力をする姿勢を持つことは非常に難しいことである。それが簡単にできるものであれば、私たちは言葉通りに苦労はしないだろう。韓国の国内で毎日のように地域や利権などをめぐって起こっている嫉視反目こそがその証であり、それはどこの国においても大差はないと思う。それだけではない。日本と韓国は、歴史問題・領土問題・中国と北朝鮮と米国の間における安保問題等々をめぐって常に対立してきた。まるで 2002 年から始まった両国における和解の雰囲気や日本における韓流などは今やまるで幻のようである。時々このような今の状況を冷静に考えてみると、果たして日本と韓国、両国における関係改善は可能なものであるか、共に協力して未来をひらいていく意思は本当にあるのか、私は疑問に思ってしまう場合が少なくない。日本と韓国の関係を憂え、その改善策を常に模索している私さえ確信がなく、まるで先が見えない状況に置かれているのではないかと思ってしまい、何もかも諦めたくなる気持ちになる時もある。

しかし、未来はもう既に私たちの目の前にあると先に言ったように、その解答は既に私の目の前にあったと思う。私のような大人たちが絶望し、偶には諦めたくなるその心を引き締めるようにしてくれる、反省させてくれる答えは正にこのセミナーに参加した私の目の前にいた学生たちの志にあると確信する。

もちろん、学生たちはこのセミナーと通して決して高い水準の成果或いは素晴らしい学問的な成果を導き出せることはできなかったかも知れない。またありきたりの話を羅列したに過ぎなかったかも知れないし、毎年あまり変わらない話を繰り繰り返したかも知れない。しかし、私はだからこそこのセミナーに意味があると思う。私は必ずしも学問的な水準が高い結果物だけが両国の間に置かれた数多くの問題や反目を解決してくれるとは信じていない。むしろ普通の人々によるありきたり話が返って難しくて高尚な理論より効果的である場合が少なくないと信じている。何故なら一般の人々或いは普通の学生たちが考えられる話こそが私たちの共感を引き出せるからである。例えば、このセミナーをもって学生たちは、たくさん話し合って、お互い決して良いものだけではないかも知れないが、決して悪いものだけでもないというごく普通の結論に辿り着くことができたのではないかと思う。つまり、本やメディアによっては決して得られない隣国の生の話を普通の同世代の隣国の人々から聞き、普通に友達になれたという感動或いは喜びの経験こそ、未来に続く両国の関係改善のためのカギになるのではないか。同じく普通の人であったというごく普通の結論に大きな意味があるのではないかと。

私はこのような素敵なセミナーを企画してくださった日本の関係者の皆さん、また参加してくれた日本の学生たちに総評の場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。私を含め、同徳の学生一同は日本の皆さんの温かい気持ちと友情を一生忘れないと思う。また、誰より力を尽くしてくださった森山先生にも感謝の意を表したい。

ともに生きるために

森山新（お茶の水女子大学）

第 11 回となる今回のセミナーのテーマは「日韓、東アジアがともに生きるために」であった。昨年は戦後 70 年、日韓国交回復 50 年の節目の年にあって、政治では解決できない様々なテーマについて、日韓両国の学生たちが率直に意見を交換しながら共同声明を発表した。今回はその成功を踏まえ、ともに生きるための未来に向けての対話を開始した。

扱われたテーマは「共生のための街づくり」「歴史教育と共通教科書」「日韓の未来と文化」「交流の促進による日韓共生」「日韓共通の課題としての女性の社会進出」であった。対立の原因となっていた過去をいかに克服し、共同の声明を行うかが昨年の大きな課題であったが、今年は、対立という現状を共生へと転換していくにはどうしたらいいかという点について、話し合いが持たれた。事前のテレビ会議システムでの交流と、代々木、草津での合宿を通じて育まれた友情の絆を基盤としながら、日韓両国の学生たちが納得できるような具体的な方案を模索し、提示された最終発表は、教員の我々からしても学ぶべき点が多く、学生たちがこのような対話と協働を続けていくことで、日韓の共生の道は拓かれると確信している。

また、今年は、各イベントの担当を決めるだけでなく、学生代表を日韓双方から立て、進行のほぼ全てを学生の手に委ねた。学生に進行を委ねることで、セミナー自体を自らのものと捉え、その成功を能動的に捉えるきっかけとなる。さらに、国際イベント開催の成功体験は、必ずや将来、国際的な協働作業を行う際の自信となる。実際に行ってみると、学生たちは主体的に動き、工夫を凝らし、独創的かつ学生の目線での有効な運営を実施しており、主導権を学生に委ねるという選択が正しかったことを痛感した。

さらに昨年に引き続き、日本の学生には第一次発表を韓国語で行ってもらった。これは、ヨーロッパが共生の道を歩むに際し行き着いた、複言語主義（plurilingualism）という理念とも合致するものである。お互いがお互いの言語を学ぶことは、対話のチャンネルを増やし、コミュニケーションを促進するのみならず、自己中心、自文化中心の見方やナショナルアイデンティティを克服して、インターナショナルなアイデンティティ形成につながるというものである。実際に外国語を学ぶことの困難を日本の学生が共有することで、日本語能力が完全とは言えない中、日本語で対話を行う韓国人学生の立場に対する感謝と敬意が生まれ、言葉の壁を両側から崩し、対話していく土台が築かれていったと思う。また学んだ言語を用いながら政治、歴史などの問題を扱うことも、政治や歴史認識に潜む自国中心の視点に気づき、克服することにつながり、国や文化を超えたシティズンシップ（intercultural citizenship）の育成につながったのではないかと確信している。

最近、世界ではテロの多発、ヨーロッパへの移民の流入、英国の EU 離脱、アメリカ大統領選へのトランプ候補の台頭など、「ともに生きる」とは逆行するような事件が相次いで発生している。東アジアにおいても、領土・領海の問題、慰安婦の問題などで対立の構図は今も残っている。このような試練を乗り越え未来を担うべき若者が、共生の道を模索し、共同発表を行うことは大きな意味があると言える。

最近、女性リーダーがいたるところで誕生しているが、日韓両国を代表する女子大学の学生が居場所を共有しながら勝ち取った成功体験は、必ずや女性リーダー育成へとつながり、対立多き今日の社会を良き方向へと導いてくれると信じたい。

最後になったが、本セミナーの成功にご尽力いただいた、同徳女子大学校の日本語学科の金嚅泳先生をはじめとした諸先生方、お茶の水女子大学のグローバル文化学環、グローバル教育センターの諸先生方やスタッフの皆さんに心から感謝の意を表したい。